

資産家夫妻殺害事件

千葉の県人 鎌田 留吉

霜見夫妻がおびき出され、殺害されるという悲惨な事件があった。この事件の犯人は、数億円を損させられたことを怨んでの犯行と、供述していると言う。

実は私は、この夫妻をよく知っている。例の大間のマグロのパーティに夫側の唯一の友人として参加したりもした。そんな関係の私は、この事件は三つのギャップが生んだ悲劇だと結論付けた。

①「しょうがないちゃ！」のギャップ；恐らく全ての証券マンは、運用の失敗に対し、多かれ少なかれ、「しょうがないじゃないですか！！」と開き直った叫びを心の中に持っている。極端な例を挙げるならば、ギリシャ国債のデフォルトの可能性など、オバマ大統領やバーナンキさえ知らされなかったことなのだ。それによって世界中のリスク資産が暴落した。無論日本中の証券マンが勧めてきた商品群もだ。これはしょうがないとしか言いようがない。つい三日前まで理路整然と自信満々にその商品につき説明してきたにも関わらず、である。私は日経新聞を取るのを止めて久しいが、その理由は彼の新聞に事前にサブプライムローンについて警告は勿論、何等の解説すらなかったからである。

しかし、一般社会の人にとってはそれでは済まされないものがある。グローバル化し複雑化した現代社会において、証券の世界は最も国際的な事件の緊密度が増している。それに対し普通の大多数の人たちは、アメリカの「財政の崖」などとは無縁の生活を送っているのだ。失敗に対しどれだけ真摯に謝るかでそのギャップの幾ばくかは埋められるのだが、「しょうがないちゃ！」と開き直りにも似た態度をとる人間もいる。

②金額の重さについてのギャップ；犯人にとって数億円は自分の人生の大部分を賭けた重要度の極めて高い金額であった。しかし、大きなファンドの運用者にとっては、**one of them**。何十分の一にしか過ぎない。ファンドの運用者はお金の感覚が麻痺する。昨年耳目を聳動させた AIJ の浅川さんは終わりの頃は債券の先物とオプションで一年に57兆円を動かしたそうだ。そんなことを意識したら機動的な運用は出来ないということも事実ではあるのだが、**boutique** 型の運用者は出資者の人生を想像すべきである。

③資金収集力と運用力のギャップ；日本で優秀な営業マンは、お客様の信頼を得る人間であるのだが、その人間が本社の情報で運用を担当する。言うまでもないことだが、営業力と運用力は全く別物である。相関関係はない。学校の勉強と運用力とに相関関係がないのと同じである。霜見さんにしろ、浅川さんにしろ優秀な営業マンではあったかもしれないが、優秀な運用者ではなかったということだろう。しかし日本の一般の人々は、両者が同一の能力であるように誤解しているひが多い。

そして、この事件に際し私が総括したことは、「間接金融中心で終始したこの日本という国にあっては、お金の出し手は無論、運用者においてさえも、資金運用につき真剣な議論や考察がなされたことがついぞなかった！！」ということである。 2月13日記